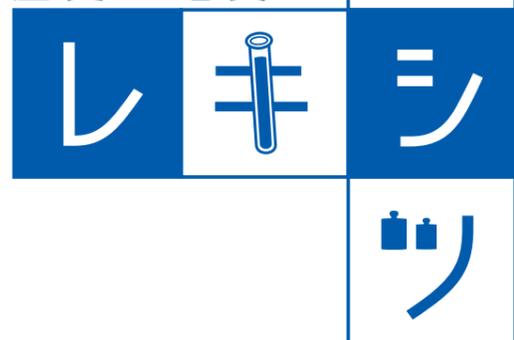




歴史 × 地質



▲ 星田村大絵図

夏は雨の多い季節です。近年は大雨による被害も多く、防災対策の重要性が叫ばれています。今月は、そんな防災にまつわる歴史×地質を紹介します。

先月号の獅子窟寺から見た現在の天野川の写真で「堤防でよく見えないし、全然、夜空の天の川っぽくない」と思った人も多いと思います。実は江戸時代に具原益軒が見た天野川は白くてきれいな反面、危険な川でもあったため、その後形を変えていたのです。

江戸時代、全国でまきに使うための木の刈り過ぎにより、はげ山になる山が続出しました。江戸時代の星田村の絵図にも、山にはわずかに木が描かれるのみで、大半に白い山肌が描かれています。木は根を張り土砂を留めておく力がありますが、それがなくなった山は雨のたびに土砂が川に流出してしまいます。天野川は、山々から流出し続けた土砂によって天井川となり、よく水害が起こる川になっていました。

明治時代になっても交野の山ははげ山のまま、天野川も危険なままでした。こうした状況は交野だけ

でなく、淀川水系全体で起こっていたため、明治8年(1875)、日本に招かれたオランダ人土木技術者、ヨハネス・デ・レーケが治水工事に取り組みます。

デ・レーケは川の源流の山からの土砂流出が水害の原因と考え、土砂をくいとめる事業を進めました。支流の1つである天野川にも砂防施設が作られました。今でも水辺プラザ付近にある天野川砂防堰堤や、尺治川の床固工・砂防堰堤はこの事業により作られたもので、貴重な明治時代の遺産として国登録文化財になっています。

その後、天野川にも堤防が整備され、昭和中期からまきの利用も減ったため、交野の山々にも緑が戻ってきました。

白砂の広がる天野川を見ることができないのは残念ですが、近年の相次ぐゲリラ豪雨でも天野川が氾濫しないのは、こうした先人たちの努力によるものなのです。



▲ 尺治川砂防堰堤(国登録文化財)



▲ 天野川砂防堰堤(国登録文化財)



@katanoswitch

こちらでもリポストしています。
アカウントへのフォローもお待ちしています。

みなさんからハッシュタグ #タノシカタノシ を付けて投稿していただいた写真を紹介します!

